『ビッグ・キャッチ』
浜崎航 meets 松本茜トリオ

コンセプトレコーズ
CD-01
¥2,500 6/26
2013年3月11～13日「Fujitsu-Ten Studio Forte」録音

■1.ビッグ・キャッチ 2.ハイディング・プレイス 3.ミーン・ホワット・ユー・セイ 4.イフ・ユー・ニード・ア・フレンド 5.レッツ・ゴー・トゥ・ザ・シー 6.プレイング 7.ラヴ・レターズ 8.キャント・ウィ・ビー・フレンズ 9.ジェイジェイ 10.モニカ 11.ミス・サンシャイン■浜崎航(ts,ss,fl)、松本茜(p)、幡上康志(b/1,2,4,7,8,10,11)、竹田達彦(ds/1,2,4,7,8,10,11)、日景修(b/3,5,6,9)、黒田和良(ds/3,5,6,9)、浅井良尋(as/6)

ハードバップ魂みなぎる痛快ニコニコ・ジャズ

実力派テナー浜崎航の最新作は、松本茜トリオを大フィーチャーしてのゴキゲンな痛快ハードバップ・ジャズ。難解なメロディと変拍子の嵐のコンテンポラリー・ジャズに食傷気味のジャズ・ファンに贈るオアシスのようなアルバムだ。浜崎といえば、新世代テナーの先駆としてシーンに颯爽と登場した逸材。堀秀彰(p)との双頭ユニットEncounterで聞かせる現代的なオリジナルと新感覚のテナー・サウンドから一転して、本作では逞しいトーンと溢れる歌心でスウィンギーに吹きまくるプレイは圧巻だ。もうひとりの主役である松本茜は、オスカー・ピーターソンやフィニアス・ニューボーンJr.のスタイルを継承する生粋のハードバップ・ピアノ。今どきの若手では珍しいストレートなスウィング感と、両手を駆使したダイナミックなフレイズが何よりも魅力的だ。ただ豪快なだけでなく、③⑧での抑え気味のレイドバックしたプレイも実に上手い。⑥では若手アルトの浅井良将がゲスト参加し、浜崎との両者一歩も引かぬ火の出るようなバトルは本作のハイライトだろう。古いとか新しいというスタイルを超越して、メンバー全員のジャズへの熱い想いとプレイする喜びに溢れた、爽快で快楽的な演奏の数々。ジャズはスウィングとブルース、そして何より「イエ～」と言ってなんぼの音楽だと再認識させられるジャズの楽しさが凝縮した傑作。 〈星野利彦〉

『レイン・グラス』
佐伯真梨

ラグマニア
(Ragmania) XQCJ-1010
¥2,500 6/19

■1.ディープ・ラビリンス 2.レストレスネス 3.Kira-Kira☆ 4.クロマティック 5.ジェントル 6.マボロシ 7.フラジャイル 8.リレーションシップ 9.レイン・グラス 10.トライアングル 11.フェイス 12.ディセンバー24■佐伯真梨(p)、坂崎拓也(b)、柴田亮(ds)

流麗かつ繊細で、表情豊かなピアノ・トリオ作品

関西を中心に精力的な音楽活動を続けている新進気鋭のピアニスト、佐伯真梨が発表したセカンド・アルバムが本作である。2年前にリリースしたファースト・アルバム『アナベル』は、ジャズとクラシックのディスクに分かれた2枚組で、彼女の多彩な才能を余すところなく伝えた作品だったが、新作では、ジャズ・ディスクのメンバーと再び顔を合わせ、耽美的でありながら、表情豊かなプレイをピアノ・トリオの編成でたっぷりと収録した。童謡の「きらきら星」をアレンジした③の「Kira-Kira☆」を除き、すべて彼女のオリジナル曲で、自らの体験をもとに浮かんだナンバーが多く収められている。例えば2歳の娘から教えられたキャンプ先の景色、愛犬ナナとの関係から誕生した曲、ある瞬間の感情を捉えたと思われる楽曲等々。佐伯の喜怒哀楽が波動となって伝わり、自分の感情と共鳴する。いずれの曲も非常に流麗かつ繊細で、重なり合う響きを大切にしながら、根底には常に美を追求する姿勢が感じられた。ベースの坂崎拓也、ドラムスの柴田亮も、全体のバランスとサウンド作りを第一に考え、その中で個性を発揮しているのが素晴らしい。ちなみに今回、彼女が弾いているのはイタリアのピアノ、ファツィオリで、初めて鍵盤に触れた瞬間から虜になったそうだが、確かに佐伯の音楽性とファツィオリの相性は抜群だと思う。 〈菅野 聖〉

『ベスト・ウィッシズ』
藤村麻紀

ディスクユニオン
MAKI.TV-0001
¥2,500 6/26
2012年9月10、11日 東京・池袋「アップル・ジャンプ」ライヴ録音

■1.レイ 2.マイ・フーリッシュ・ハート 3.おいしい水 4.ムーン・ノウズ 5.ジャスト・スクイーズ・ミー 6.サマータイム 7.ア・サウザンド・キシズ 8.エクスプレイン 9.ザ・ローズ 10.キャラヴァン■藤村麻紀(vo)、堀秀彰(p)

ジャズ・ヴォーカルを変革する"異次元"からの贈り物

"天は他人が羨むほどの才能を彼女に与えたけれど、唯一ジャズとの出会いだけは機が熟すまでお預けだった"という言葉があながち冗談ではないと思えるのは、経歴と音楽的な実績が微妙にすれ違っているのではないかと感じるからなのだけれど、その機はこのアルバムのリリースによって完全に熟したと宣言したい。つまりこれほどまでにお預け状態だったジャズ・ファンは、藤村麻紀が巻き起こすであろうヴォーカル・シーンへの強力な衝撃波を受ける準備、すなわちこれまで抱いていたヤワな妄想を捨て、"歌を聴く"ことの意識を変革する必要に迫られることになる。これは彼女の意識が変革しているのだから、そうするしかない。耳にしたものをそう思わせてしまう藤村麻紀の魅力は、豊かな声量と正確なピッチ・コントロールによってまず形作られるが、それだけでは"上手い歌い手"に過ぎない。彼女をジャズ・ヴォーカルのイノヴェーターたらしめているのは、テクニック以上に共演者とのコラボレーション能力の高さだ。本作では、堀秀彰のピアノと真正面から向き合って、「声も楽器」という持論を証明するに足る鮮やかなソロ・パートのパフォーマンスを披露している。堀秀彰とは10年近くの共演歴があり、毎回必ず違う音楽を生み出すための努力をお互いが欠かさないという関係性があることもまた"異次元ヴォーカル"である証拠となるだろう。 〈富澤えいち〉

『青い伝説』
さかもと未明

24ジャズジャパン
(24 JazzJapan) DDCZ-1874
¥2,500 6/5

■1.しおり(夏) 2.ミルキー・ウェイ 3.愛のレシピ 4.熱帯夜 5.夏の終わり 6.私は風 7.風鈴 8.古いオルゴール 9.しおり(冬) 10.ラ・ネージュ・ブランシュ 11.青い伝説■さかもと未明(vo)、今[illegible](g)、重実徹(p)、向井滋春(tb)、クラミー(sax)、後藤次利(b,arr)

苛酷な生き方にケリをつけ、瞑想に耽った私的霊歌集

雑誌に突撃漫画や体験ルポを連載、妖しい角度で世情を斬る独特のエッセイを著し、ワイドショーでは異色コメンテイターとして体制にそぐわぬ保守論を展開した。ところが7年前、難病指定のある膠原病を告げられ、手への影響を考え書くことからのシフトを考えるようになる。それでチェルシーと名を秘し、孤独を過ごすことの多かった幼少よりの慰みである"歌"にひとつ、光明を見出す。あれから6年、(名義を未明に戻して)がむしゃらだった生き方にケリをつけるように、瞑想的なウィスパリング・ジャズを歌いだしていた。そこで出会ったクリヤ・マコトの音が、ただジャズに属していただけのことかもしれない。それは2作目となる本作に接するならば一目瞭然。切ないほど純粋でかよわい自作詞に、今度は後藤次利が曲を付し、語り口調のボッブスを歌ってみせるのだ。舌足らずで、決して上手いというわけでないのに心を持っていかれるのは、アルバムの仕様がどこか昭和末期のあの音楽的に成熟しすぎて根を持たなくなった歌謡界で、本当はどこかにいたはずの幻の歌手が作ったヒット曲集を思わせるからだ。張りつめた時代を経て、その裏に潜むやり場のない悲しみを受けとめてみせた、彼女にしか唱え得ない私的霊歌を聴く気がしてくる。制作に2年の歳月を要しただけあって捨て曲がなく、気怠いディアスポラたちの風をふっと舞いわたらせる。 〈長門竜也〉